

# Library Mate

## 特集:インタビュー

### 「利用の場から図書館を見る」

昨年5月にコンピュータ化して以来、一年が経過しました。本年度からは、「図書館インフォメーションシステム」「蔵書検索用端末」「CD-ROM検索用端末」が設置され、コンピュータ化の成果が皆さんの目に見えるようになったのではないのでしょうか。

そこで、使ってみて実際どう感じているのか、果たして便利になったのか、改善すべき点は？どのような要望があるのか、これからの図書館を探る上で参考にさせていただきたく、大学図書館内でインタビューを行いました。

#### I. インタビューの方法

方 法：図書館内で各検索用端末機を利用中の学生に声をかけた。

実 施 日：1995年10月3～9日

回答者数：60名

#### II. 回答者の内訳

回答者 60名

所 属 \ 学 年	1	2	3	4
大 学 院	1	2		
国 文 学 科	4	3	11	5
英 文 学 科	1		6	2
美学美術史学科	2		2	1
生活環境学科		1	2	4
生活文化学科	1			
食生活学科	3	5	2	1
短 大	1			

#### III. 質問と回答

1-1. 図書館インフォメーションシステムを知っていますか？

YES 43人 (72%)      NO 17人 (28%)

・知ってはいるが、使ったことはない。(8名)

1-2. 図書館インフォメーションシステムでは、サービスの概要や本の場所を案内していますが、使った感想はいかがですか？

- ・どこにどういう本があるかがわかった。
- ・詳しくて便利。使えるっていう感じ。
- ・使い易いし、忙しそうな職員に尋ねなくても済むので、気軽に楽しんでいる。
- ・使い方がよくわからなかった。
- ・このシステムで何が分かるのかがはっきり分からない。
- ・わかりきったことしか出ないので、もっと詳しいものがほしい。
- ・利用案内、貸出冊数など基本的なことがわかってよかったです。
- ・図やイラスト等が多く使われていて分かりやすい。
- ・図書館内の配置図が良い。
- ・配架場所の地図がわかりづらい。
- ・映画を見たいと思って、「視聴覚資料」の利用の仕方を見ていたところです。雑誌のおおまかな場所や、公共機関の場所を調べたりしています。



- ・卒論の時期なので、公共機関を使いたいと思って調べた。地図のプリント・アウトができてよかった。
- ・国文学研究資料館の地図を印刷して、実際に行ったことがある。
- ・細かいことが知りたい。ズバリ、この本はここにありというようない!
- ・自分の探しているテーマがNDC(日本十進分類法)の、どの番号にあたるかが分からないので、配架場所を探せない。
- ・芥川龍之介の研究書を探したいときに、日本文学の場所までしかわからない。
- ・画面のプリントアウトに時間がかかりすぎて、待っている間に時間がなくなる。
- ・新着書の紹介もしてほしい。
- ・以前より図書館の利用範囲が増えました。さらに充実していくことを楽しみにしています。

2. 機械検索(Online Public Access Catalogue 略称OPAC)で検索したことがありますか?

YES 43人(72%) NO 17人(28%)

3. 機械検索で資料を探してみてもいいですか?

- ・画面は見やすい。操作も簡単である。
- ・マウスとキーボードの両方が使えるので、操作し易い。使いやすい。
- ・タッチパネルがいい。
- ・レポートで探していた本がすぐに見つかった。
- ・卒論なんかで必要な時、キーワードで探せるので便利。短大の情報も見れて便利。
- ・一度に探せるので無駄な時間が省けます。
- ・カード検索より求めるものが早く調べられる。
- ・使い方、操作方法がむづかしかった。
- ・検索結果がでるまで時間がかかる。
- ・わかりにくい。あるはずなのに、出てこないことがあった。
- ・主題(キーワード)で探したり、著者から探す。検索結果は巧くでている。
- ・主題で探している方が多い。検索語によると思うが、予想通りには出てこない。カードを見ないといけないのは、二度手間である。

- ・本の題名で探している。「樋口一葉」に関する図書を探していたが、数冊しか出なかった。1994年以降しかデータがないというのは、知らなかった。
- ・探していた本が古い年代のものであったので、ほとんど出てこなかった。
- ・カードの方が早くみつかるし、直接書架へ行って探している。
- ・カードは多くの人が同時に使えるが、機械は順番を待たなければいけない。台数が足りない。検索のコツがあれば教えてほしい。いつも小さなテーマで調べているが見つけれない。
- ・やり方が悪いせいか、ヒットしない。検索のやり方についての説明書で、より詳しいものを備え付けておいてもらいたい。電化製品のマニュアルのようなものがほしい。

4-1. CD-ROMを利用したことがありますか?

YES 15人(25%) NO 45人(75%)

- ・サービス自体を知らなかった。
- ・使う時間の余裕がない。
- ・これから使いたい。
- ・これからTwain's worldを使ってみたい。
- ・いろいろなCD-ROMを使いたい。

4-2. 使ってみてもいいですか?

- ・使ってみたかったが、どうすれば使えるのかわからなかった。
- ・使い方が分かり易いともっと良い。CD-ROMがあっても、インストールがまだで、使用できないものがあった。
- ・「駅すばあと」を使ったことがある。
- ・J-BISCを使ったが、何があるかがわかった。使いやすい。面白かった。
- ・図書館学の授業で雑誌記事索引を使った。
- ・目録(二次資料)をよく使う。他のものにも興味はあるが時間がなくて使えず残念。
- ・美術作品などを学ぶのには適している。家政学系のものも増やしてほしいです。栄養や医学関係のものも利用できればと思います。
- ・著作権の関係でプリントアウトできない画像があって不便。



## 5-1. 外部データベースを知っていますか？

YES 18人(30%) NO 42人(70%)

- ・サービス自体を知らなかった。
- ・文献の取り寄せのサービスは教授から教えてもらったことがあるが、外部データ・ベースについては、いわれたことがない。
- ・聞いたことだけあるが、使ったことはない。
- ・図書館学の授業、図書館見学の時に、館員のデモを見学した。
- ・すごく役に立ち、助かっている。

## 5-2. どんな外部データベースの検索サービスを利用したことがありますか？

- ・日経テレコン。
- ・国文学論文目録データベースから、文献複写依頼をした。
- ・国文学論文目録データベースから、他機関の紹介状を書いてもらった。
- ・NC-CATで所在が分かり、それが貴重書だったので大阪まで閲覧に行った。
- ・雑誌記事索引データベース。
- ・家政学文献索引データベース、科学技術文献情報、Life Science Collection

## 6. 今後、図書館の機械化について望むことがありますか？

- ・端末の使い方がよくわからないし、どうしたら良いかわからない時が多いので、指導してほしい。
- ・使いこなせるようになりたいので、もっと調べ方の説明をしてほしい。
- ・学生自身の努力は必要だが、操作手順の説明書は詳しくれば詳しいほど有り難い。
- ・早く機械検索で、すべてできるようにしてほしい。古い本のデータ数が増えてほしい。
- ・他大学のデータを一覧できるようにならないか。
- ・文字だけでなく、音とかで聞けるようになったらいい。
- ・外部データベースも自分で検索したい。
- ・図書館インフォメーションシステムと機械検

索が合体して、1台で本の配架場所まで分かる

- と良い。
- ・貸出業務を早く実施してほしい。
- ・雑誌の機械検索が出来るようにしてほしい。
- ・端末台数が少ない。10台くらい必要ではないか。
- ・端末のそばに椅子が欲しい。
- ・慶応大学藤沢キャンパスのメディアセンターのように、学生が使えるコンピュータを設置してほしい。
- ・平日の開館時間を9時ぐらいまで延長してほしい。
- ・図書の充実を忘れないでほしい。

## IV. インタビューの結果から

## (1) 周知度

「図書館インフォメーションシステム」「蔵書検索用端末」は、7割方の人が周知、利用している。しかし、検索時間を要するCD-ROMやデータベース検索サービスは、まだ周知されていない。利用者ガイダンスを含め、宣伝活動を増やす必要がある。

## (2) 操作性、画面のわかり易さ

おおむね良好である。しかし、操作の方法、検索の仕方が分からないという声もあり、利用法について、ガイダンスは不断に行う必要があることが認識できた。

## (3) 端末台数の増加の必要

## (4) システムへの要望

「蔵書検索用端末」の操作で、配架場所まで分かるが良い。音とかで分かるようになれば良い。他大学のデータが一覧できるようにならないか、等の可能性を探る要望もみられた。

## (5) 全蔵書のデータベース化への要望

一日も早く全蔵書が、機械検索できるようにしてほしい。

## (6) その他

貸出業務の開始、図書の充実、開館時間の延長等の要望にも耳を傾ける必要がある。

## 利用者からみた図書館

生活環境学科教授 飯島 俊郎

本学(大学・短大)の図書館は変わりつつある<sup>1)</sup>。機械化が叫ばれてから久しいが<sup>2)、3)</sup>、最近、利用者にとって目に見える形となって、昨年6月に文部省学術情報センターの学術情報ネットワークNACSIS-IRと結ばれて<sup>4)</sup>文献の探索が便利となり、今年の4月から検索用の端末も設置され、本学蔵書や他大学の図書館の書籍探索・借用(ILL)も可能となってきた。利用者にとって明るい見通しの材料は多い。

蔵書探索については現在、書誌入力に絡むといったばかりで全蔵書のデータが入っているわけではないので利用価値は未だ少ない。大変な仕事であるが、一日も早く大学・短大全蔵書40万冊の書誌入力<sup>5)</sup>を完了して欲しいものである。また国会図書館の蔵書にも簡単にアクセスできることが望まれる。

図書館利用の仕方は専門分野により大分異なるが、私たちの化学の分野では雑誌文献の探索が以前に比べ大変に便利になった。ついこの間までは、専門誌やそのContents Sheetを月々当たって、必要な報文を読み取っていた。この作業は、これでまた宝探しに似た楽しみもあった<sup>6)</sup>が効率の点では大変劣る。

現在利用できるのは学術情報センターの提供する50種類近くのデータベースの検索システムである<sup>7)</sup>。データベースを決め、指定した複数回の検索語からその論理積をとるか、和をとるか、差をとるかの指定も無駄なゴミを出さないためにも大事である。現在の試行期間では、図書館員にその作業をやって頂いているが、文献探索は本来、労力、経費とも受益者負担であるのが当然であるから、図書館の設備を使用して学生、教員が自分で検索し、経費は各ゼミ、または個人の支払とするのが良いと思う。探索の作業に慣れない人に館員による指導は必要であろうが。

利用者が検索語、論理演算の選択を試行を重ねて適正に選んで探索し、画面に現われた文献を必要と判断すれば、すぐに抄録を打ち出して内容の検討をし、さらに全文に眼を通す価値ありと判断したものは別途の複写依頼となる。こ

の複写は相手図書館次第なので意外と時間のかかる場合が多いのが残念である。

これで文献情報の入手は高速化されて、溢れるばかりの情報に囲まれることができる。そこで利用者にとっての課題はこれら情報の選択の適正化である。文献を多く集めても、役に立たない不要なものはやがてゴミ箱へ直行となってしまふ。また情報は一旦入手し複写の形で手許に残ると安心して結局、読まないで終ることさえある。これはわが身への自戒でもある。

以上利用者としての現利用状況と希望点を挙げたが、結論として、現在進められている方向の機械化の推進に大いに期待するものである。

冒頭に揚げたように本学の図書館は変わりつつあるが、私たちの大学図書館に限らず広く「図書館」「大学」そのものが、社会の高度情報化とともに大きく変わろうとしている。研究室、教室のパソコンが学内に張り巡らされた光ファイバーケーブルに接続され、授業にしても、学生はコンピュータネットワークを使って教員とともに学ぶという形式に大きく変わって行くに違いない。その変わり様は図書館にも及び、各研究室、教員居室からは言うに及ばず、自宅自室から図書館の蔵書目録が検索できるようになろう。さらにその先は書誌情報に止まらず、本の内容そのものがインターネット上で読めるようになろう。このような先を見通すと、まさに図書館は今大きく変わりつつあると言えよう。

- 1) 八幡隆文：これからの図書館、Library Mate 14, 1 (1995)
- 2) 城田秀雄：図書館の機械化ということ、Library Mate 9, 1 (1992)
- 3) 安達 勉：大学図書館機械化の現況と課題、Library Mate 11, 1 (1993)
- 4) 三隅治雄：データの入力開始にあたって、Library Mate 13, 1 (1994)
- 5) 茂木コウ：就任にあたって、Library Mate 12, 1 (1994)
- 6) 飯島俊郎：Serendipity, Library Mate 5, 2 (1990)
- 7) 電気・電子情報学術振興財団：NACSIS-IR総合マニュアル(改訂版)(1992)

## b r o w s i n g

短大国文学科助教授 佐藤辰雄

“図書館は外なる頭脳だ”などと言うと、ずいぶん堅苦しくなるが、しかし事實はそうだ。知っている分の何倍もの、読んだことはおろか見聞きすらしたことのない本が、そこに充満している。手に取り、読み、理解して、我が身の内なる頭脳の知と情の体系を豊かにする、このような恩沢の可能性を秘めた本が目の前にあふれている。要は人間の働きかけにあらう。書物が陳列されるだけなら、図書館は高価な物置にすぎない。

英語にbrowsingという言葉がある。牛など家畜が、のんびりと草を喰み、若葉をかじりぐいするさまを言い、転じて本をあさり回ったり、拾い読むことを意味する。このbrowsingが至福を与えてくれるのだ。さまざま“まきば”はどこでもいい。例えば、普通の本屋とか古本屋、そして図書館等々。しかし興味をひく本に出会った時、安上がりなのは何と言っても図書館である。買ってから“失敗した！”と後悔する恐れもない。本の背表紙を一冊一冊と目で追い、あるいは手に取りながら、一段が終わったら次の段、一棚から別棚へと進む。ノルマがないから急ぐ必要はないし、途中飛ばしても誰がなじろう。少しばかり疲労を覚えたら、かたわらの椅子がいやしてくれる。

春は、心はずます陽光と満開の桜に、あえて背くかの如き我を秘かに誇り、夏はひんやりした涼気に暑さをしばし忘れられよう。秋は、うっすらと汗するさわやかなスポーツや、食欲をそそって恐いばかりの豊かな稔りと無縁の、書(ふみ)読む英俊・才女をウツトリ気取るに良く、冬は、ほんわりした暖風に寒さを遠く離

れられよう。四季を問わず、スティックでアカデミックな“わ・た・し”と、たわいもなくナルシスな気分になれることうけ合い。思わぬ発見をした時の驚きと興奮は、それ自体が財産である。もし、気にいった本や役立ちそうな書に出会ったら、それはそれでご同慶、見つからなくてもそれだけのこと、別にムダな時間を費やしたと気にやむ必要はない。暇つぶしができたわけだし、何よりもムダに見える時間が貴重なのだから。

幸いなことに、実践の図書館はほとんどが開架なので、いくらでも本のつまみぐいが楽しめる。未知との遭遇を保証する上で、この方式はとても優れている(チョットお追従すれば、図書館の見識も)。カウンターを通して、制限された冊数の請求図書としか接触できないのならば、利用者が奪われる出会いの可能性は、いったいどれほどになるだろうか。効率が悪いだけでなく、既知の本を仲立ちとする未知との出会いなど、たかが知れてる。だから、特殊な場合を除くのは当然としても、閉架方式は罪深くすらある。

それなりに恵まれた実践の図書館を、ゆっくりと逍遥してみよう。本との新しい出会いが、無常の喜びに誘(いざな)ってくれるかも知れない。反対に、自分の既知領域の狭小さと未知世界の広漠さを気づかせ、人間の知恵と技が微塵でしかない現実まで教えるかも知れない。だが、人の営みが遅々として、ひ弱で愚かしくとも、確かに蒙をひらきつつあることを知る魂は、失望しない。にこやかな愉悦すら感じ、だからbrowsingはやめられないのだ。道端に金が落ちてやしないかと、目を凝らすように。



# 学術情報センター ILLシステムの利用開始について

## —利用者への文献提供の迅速化をめざして—

大学図書館では、1995年9月から、学術情報センターILLシステム(NACSIS-ILL)の利用を開始しました。ILLシステムとは、他機関の図書館との間で実施している文献複写や現物貸借に関わる業務(図書館間相互貸借:Inter-library loan)のうち所在調査や通信・連絡を、学術情報センターのネットワーク上で行うシステムです。(文献そのものは、電子的に取り扱いません)

他機関への依頼業務の流れとしては、学術情報センターの総合目録データベース(NACSIS-CAT)により所蔵館を探して、オンラインで複写や貸借を依頼。文献到着の通知やクレーム、問い合わせなどもオンラインで行うことができます。また、他機関からの依頼も、同様にオン

ラインで受付することになります。ただ、文献の送付・料金の受け取りは従来どおり手作業になります。

このシステムを利用することにより、今まで郵便で依頼状を送り、到着までに1~2日かかっていたのが、オンラインで即時に受付してもらえるようになるので、その分、文献の提供までの時間が短縮されます。依頼から文献の到着まで、従来なら平均して6~7日かかっていたところを、早ければ3~4日で済むようになりました。文献提供までの時間を短縮することにより、少しでも研究・学習の支援ができればと思います。

---

## 館 員 の 横 顔

平 野 恵 子

4年間学生として利用してきた図書館が、この4月から私の職場となりました。利用者から一転して、利用者をサポートする立場になったわけです。と言いましても、学生の頃はもっぱら図書の閲覧のために図書館を利用しただけで、レファレンスなどのサービスを利用したことはほとんどありませんでした。本を借りたのもほんの数回だったと思います。

なぜ私が大学図書館を有効活用しなかったのか？それは、私が小学生の頃より利用していた図書館が機械化されていたことにあるかもしれません。“図書の管理は機械で”というのが当り前の環境に身を置いていたので、ブックカードに名前を書いたり、図書の検索をスムーズに行えないことをとても不便に感じたのです。レポート作成や試験準備、特に卒業論文の作成にあたっては、効率良く大学図書館の資料を検索することができたら…と何よりも本学図書館が機械化されることを望んでいました。ですから、

Library Mateに『機械化』の文字を見た時はとてもうれしく思いました。しかし、実際は機械化と同時に機械検索ができるわけではなく、コンピュータはなかなか図書館に姿をあらわしませんでした。データベースが完成していなかったからです。

現在ではみなさんの目にも分かるくらい機械化が進み、すでに図書館内に設置された端末で資料を探したことのある方も多いことでしょう。しかし、データベースに図書館の全資料の目録データはなく、検索の際には従来の冊子体やカード目録にもあたっていただくことになります。多少不便かと思いますが、私たちも少しでも多くのデータを入力しようと頑張っています。

このように、今は自分の学生時代の願いであった機械化に取り組んでいますが、これからも図書館員でありながら利用者の目も失わずにいたいと思っています。そして、より良い図書館を目指していきたいです。



# ブック★ストック

## —蔵書ガイド—

### 仮名草子二種

近年本学図書館に収集された仮名草子、茨木春朔作「水鳥記」と、浅井了意作「堪忍記」の二点を紹介したい。

ようやく戦乱の世が去って平和が訪れた近世初期、幕府の文治政策、印刷術の発達、町人階級の台頭と相まって、武士町人を問わず旺盛な知識欲がわいてきた。そうした需要に応じて、浪人、公卿、僧侶等の手になる多様な読み物類が誕生した。それらは、教訓性・実用性・娯楽性を基調とする啓蒙的な物語で、漢字で書かれた漢籍類に対して、平易な仮名で書かれていたため、「仮名草子」と呼ばれている。

仮名草子の作者は、当時の知識階級に属する人が中心であった。総数約200点もある仮名草子の流布形態としては、近世初期から寛永(1624～1644)頃にかけて活字本で流布し、その後は整版本が圧倒的に流行した。また、別に写本の形態でも数多残っている。

#### 1 水鳥記 2巻 (黒川文庫)

茨木春朔作 寛文7年(1667)京都中村五兵衛刊本 2冊 27.3×18.0cm

江戸大塚の地黄坊樽次(春朔)は、和歌も書も嗜むが、一斗五升は飲むという大酒飲みで、酒の上の友人門人を多数抱えていた。一方、武州大師河原の池上太郎左衛門も大蛇丸底深と号する酒豪で、やはり多くの門人を擁していた。慶安元年(1648)9月、樽次とその一門が底深のとこ

ろに押しかけて酒戦を催した。この酒戦の顛末を、当時者である春朔が、源平合戦になぞらえて軍記物風に戯作したのが本作品である。作者は、酒井雅楽守の侍医で寛文11年没。書名の「水鳥」は酒の異名で、酒の字を扁と旁に分けたもの。

本書は、黒川真頼、真道旧蔵本。上巻の表紙に「本草」の朱印、「寛文七年版／珍本」の朱書がある。縹色表紙、元題簽付。僅かに虫損補修があるが、刷り、保存共に良い。惜しむらくは、挿絵への悪戯書きが散見される。

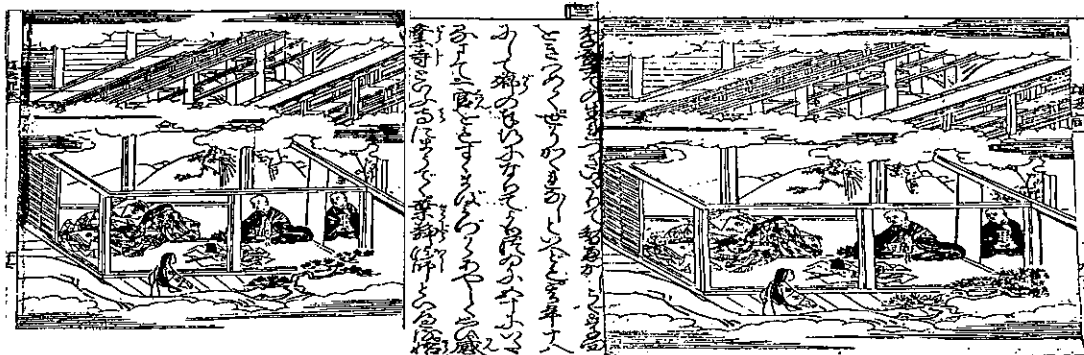
また、167年後の文化12年(1815)に催された酒戦を題材に、大田南畝が「後水鳥記」を著したが、その写本も常磐松文庫に収蔵されている。

#### 2 堪忍記 8巻 (常盤松文庫)

浅井了意作 万治2年(1659)京都滝庄三郎刊本 8冊 27.0×18.0cm

人間生活の基とすべき堪忍に関する和漢古今の逸話・巷説を列挙し、啓蒙教訓しようと意図した作品。明代の漢籍からも題材を採っている。通編25項目に分け簡単な概説とそれに関する説話を合計169話集めている。中には、読者の興味をそそるために、作者の見聞伝承する類話をも収めたようなところがある。作者浅井了意は僧侶で、仮名草子の代表的作者。

京版、江戸版共異版が多い中で、本書は、伝本の少ない初版。茶色表紙、元題簽付。保存、刷り共状態が良い。



寛文4年版 巻一(17丁表)

万治2年版 巻一(27丁裏)

### 「堪忍記」

